1

次の文章は、中学校二年生で図書委員の「あたし」が、放課後、学校の図書室のカウンターにいる場面です。一年生の時に同じクラスで、図書室では見かけたことのなかった「三崎さん」が、休み時間のたびに図書室に来るようになったので、意外に思った「あたし」は、最近「三崎さん」の様子をよく観察していました。これを読んで、(1)～(6)に答えなさい。

今日は図書委員の当番ではなかったから、こうして放課後にカウンターに居座る必要もなかったのだけれど、なにか面白い本でもないかなぁって本を借りに来たついでに、先生に留守番を任されてしまった。さっきまでブッカーがけの作業を手伝っていた図書委員の女子が、カウンターの少し離れたところで読書をしている。書店のカバーがかかっていたので、私物だ。あの紙の質感は、ラノベに間違いない。どんなのを読んでいるのか、ちょっと気になる。同じ二年生の間宮さんで、司書室でしおり先生とご飯を食べるときに一緒になったりもするけれど、あんまり話をしたことがない子だった。趣味が合うのなら、仲良くなりたいなって思うけれど、でも違ったら困っちゃうから、話しかけることができない。

ⓐちらちらと、間宮さんに眼を向けていたせいで、気がつくのが遅れてしまった。

「あの」

顔を上げると、すぐ目の前に、ここのところよく観察していた人間が立っている。

三崎さんだった。

ぎょっとして、心臓が跳ね上がる。なんなの、いったいなんの用事？（中略）

「本を借りたいんだけれど、どうしたらいいの」

「え、あ、えっと」

ⓑコンラン気味に、カウンターを振り返る。こういうときに限って、しおり先生の姿はまだ見えない。間宮さんは読書に夢中で、こっちに気づかないふりでもしているみたいだった。他の一年生も、奥で掲示物を作る作業をして、背中を向けている。

「それじゃ、その、本と生徒証を――」

彼女が持っている本に眼をやって、言葉を途切れさせた。ⓒ思わず呟いてしまう。

「それ」

あたしの言葉に、三崎さんは不思議そうな顔をした。

「借りられない？」

「えと……。そうじゃなくて」

彼女が持っていた本は、あたしがリクエストに応えて、『おすすめおしえてノート』に記した作品の一つだった。地味なタイトル、地味な装幀、地味なあらすじと三拍子揃っていて、この本を自分から手に取ろうと思う人間なんて、まずいないだろうと思える本だった。著者の名前だって『さ行』なのかと思ったら『た行』を探さないとダメだったりして、とにかく探し出すのは難しい。それなら、三崎さんがこの本を手にしている理由は、一つしかない。

「あれ、三崎さんだったの」
「あれ？」
彼女は［ⓓ］、少し難しい表情をする。
「えっと、その、あれ」
あたしは、カウンターに置かれているノートを指し示した。すると、気がついたのか彼女は少し驚いたふうに眼を開いて、それから俯(うつむ)いた。
「えっと、うん」
もしかしたら、恥ずかしかったのかもしれない。せっかく匿名(ⓔ)で書いたのに、こうしてバレてしまったら、たぶん気まずくなる。
「あ、ごめん、えっと、これ、勧めたの、あたしで」
「そうなんだ」
彼女は俯いたまま、顔を上げない。会話終了。気まずい沈黙がやってきて、あたしは必死になって続ける言葉を探す。結局、黙ったまま貸し出し手続きをした。本の上に彼女の生徒証を載せて、それを差し出す。
「はい。期限、二週間だから」
三崎さんは黙ったまま頷(うなず)いた。彼女が本を受け取って、あたしの指先からその質量が去っていく瞬間、慌(ⓕ)てて付け足した。
「よかったら、感想、聞かせて」
振り絞るみたいにこの喉から出てきた声は、ここが教室だったら、たちまち騒々しさでかき消えてしまうほど弱々しいものだった。
けれど、言葉は奇跡的に(ⓖ)トドいたみたい。
「うん」
三崎さんは、手にした本を胸に押し当てるようにして頷く。
心なしか、その口元が笑っているように見えた。
あたしは、本を渡すために立ち上がった姿勢のまま、図書室を去って行く彼女の背中を黙って見送っていた。緊張のせいか、それとも別の原因があるのか、心臓の鼓動がうるさく音を立てて、耳の奥にまで響いている。(ⓗ)どきどき、していた。久しぶりの感覚だった。掌(てのひら)に汗が湧き出て、胸が苦しくなり、頬が熱くなる。夢中になって、物語のページを捲(めく)るときのよう。心躍る冒険に、主人公と共に旅立つときみたいな、そういう不思議な感じがした。
気に入ってくれると嬉(うれ)しいな、と思った。
「だって、自分が好きな本を、好きになってくれるかもしれないんだよ」
しおり先生の言葉の意味が、ほんの少しだけ理解できた気がした。

（出典　相沢沙呼「教室に並んだ背表紙」）

(注)
ブッカーがけ――本に透明な保護フィルムを貼る作業。
ラノベ――ライトノベル（小説のジャンルの一つ）の略称。
『おすすめおしえてノート』――「あたし」が通う学校の図書室に置いてあるノート。読みたい本の条件を書いてリクエストすると、それを読んだ先生や生徒が、条件に合った本について書き込んでくれる。
装幀――本の表紙やデザイン。

(1) ――の部分ⓑ、ⓖを漢字に直して楷書で書きなさい。また、――の部分ⓔ、ⓕの漢字の読みを書きなさい。

(2) ⓐ「ちらちらと……向けていた」とありますが、このときの「あたし」の心情を説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
ア 間宮さんは仲が良い図書委員の友人の一人なので、いつもどおり本について語り合うのを楽しみにしている。
イ 間宮さんに話しかけたいが、彼女の読んでいる本の内容がわからないので、行動に移すのをためらっている。
ウ 間宮さんの読んでいる本がカバーで隠されているので、タイトルを知って自分も読んでみたいと望んでいる。
エ 間宮さんが当番だったのに、彼女は読書に夢中なので、早く図書委員の仕事に戻ってほしいとあせっている。

(3) ⓒ「思わず呟いてしまう」とありますが、その理由を説明した次の文の［　　］に入れるのに適当なことばを、十字以内で書きなさい。
三崎さんが手にしているものは［　　］だと気づき、動揺したから。

(4) ［ⓓ］に入れることばとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
ア 眉間に皺（しわ）を寄せて　イ 耳を澄まして　ウ 眼（め）に物言わせて　エ 鼻を明かして

(5) ⓗ「どきどき、していた」とありますが、この場面の「あたし」の心情を説明した次の文の［　　］に入れるのに適当なことばを、三十字以内で書きなさい。
勇気を出して話しかけたことに緊張を覚えつつも、三崎さんがほほえんでくれたように見えたため、［　　］ことへの期待が膨らんでいる。

(6) この文章の表現の特徴について説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 「ブッカーがけの作業を手伝っていた」という表現は、あたしから見た他の図書委員の様子を描くことで、図書委員同士が互いを思いやっていることを浮き彫りにしている。

イ 「こういうときに限って、しおり先生の姿はまだ見えない」という表現は、先生の行動を強調することばを使うことで、あたしが常に抱いている先生への不満を示している。

ウ 「不思議そうな顔をした」、「恥ずかしかったのかもしれない」という表現は、あたしだけではなく三崎さんの視点からも様子や心情を描くことで、物語を重層的にしている。

エ 「えっと、その、あれ」、「えっと、うん」という表現は、指示語や短い応答のことばを連続して使用することで、あたしと三崎さんの会話や関係のぎこちなさを表している。

2　次の文章Ⅰは清少納言の随筆『枕草子』の冒頭であり、文章Ⅱは文章Ⅰに触れながら『枕草子』について解説したものです。これを読んで、(1)～(4)に答えなさい。

Ⅰ

春は曙。A＿＿＿＿やうやう白くなりゆく山ぎは、B＿＿＿＿すこしあかりて、C＿＿＿＿紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

Ⅱ

『源氏物語』の登場人物がよく「泣く」のに対して、『枕草子』の人物はよく笑う。使用度数は、数をかぞえて見ればすぐわかることで、「泣く」に対して「笑ふ」が十倍を越す優位を占める。（中略）

『枕草子』の好んだ「笑ふ」が、必ず仲間を伴うものであることは、この際注意しておいてよい。ひとり笑いという、傍には気味の悪い笑いも世にはあるが、『枕草子』における笑いは、そのような無気味なものでなく、すべて仲間と顔を見合わせての笑いである。『源氏物語』は「あはれ」の文学、『枕草子』は「をかし」の文学、と評されて来たが、それは言い換えれば、「ひとりの文学」と「みんなの文学」でもあるであろう。「あはれ」は一つのことに感じて、そこから思いが他へひろがり、一段深々と感じる時の、持続的な情緒である。「をかし」の陽に対して［ⓐ］、と言うことと、持続的な情緒、と言うこととは同じことを指すものであろう。だから「あはれ」に対して陽と評される「をかし」は、非持続的な感情だと評してよいはずである。笑うことで解放されるような感情を基調とする文学は、しんみりと、余韻となって漂うものを見つづけようとするような作品ではない。ⓑ『枕草子』が、『源氏物語』のごとき長編でなくて、短小な章段を集めた随筆の形で作品となったのも、理由のあることであったと諒解される。（中略）

宮仕え女房集団のリーダー格として振舞ったのが清少納言であって、その述作は、散文作者の孤独な文章行為の軌跡と見るべきではなくて、仲間のみんなに支えられた文章行為の軌跡と見るべきものだと思われる。『枕草子』開巻第一段の、その書き出しの、

春は曙。

という文からして、そもそも仲間の支えを奥に読みとるべき文だと思われる。この文は、

春は曙をかし。

という文の、述語「をかし」を省略した文、と説かれて来た。清少納言がこの文で表そうとした内容を理解するだけでよいのなら、この見解は正当であろう。けれども、このような構造の文が、いきなり生み出された、その事情までを理解しようとする時は、これはむしろ、

をかしきもの　春は曙。

という、主題の省略と見なおす方がよいように思われる。どちらにしても結果としては同じようなものであるけれども、主題省略文の方は、そういう主題を目下の共通の話題にしている、ということを諒解しあった、仲間の間で成り立つ構造の文なのである。（中略）

ⓒみんなの文学への参加の要領をつかんだ時、清少納言から千年隔(へだた)っている現代のわれわれに、『枕草子』の世界が開放され、千年の時間差が解消するのだと思われる。

（出典　渡辺実(わたなべみのる)「新日本古典文学大系25　枕草子」）

（注）
基調――作品の根底に流れる基本的な考え方や傾向。
諒解――「了解」に同じ。
宮仕え女房――宮中や貴族の屋敷に仕えた女性。
述作――本などを書きあらわすこと。また、その本。

(1) ═══の部分A～Eのうち、歴史的かなづかいを含むものはどれですか。当てはまるものをすべて答えなさい。

(2) [ⓐ]に入れることばとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　除　　イ　隠　　ウ　隅　　エ　陰

(3) ⓑ「『枕草子』が……となった」とありますが、筆者の考える『枕草子』と『源氏物語』の違いについて整理した次の表の[X]、[Y]に入れるのに適当なことばを、文章中からそれぞれ二字で抜き出して書きなさい。

『枕草子』	「をかし」の文学。自分の内にとどめず[X]するような、非[Y]的な感情を基調とする。
『源氏物語』	「あはれ」の文学。自分の中でしみじみと味わうような、[Y]的な情緒を基調とする。

(4) ⓒ「みんなの文学」とありますが、ここで筆者が『枕草子』を「みんなの文学」と表現した理由を説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　清少納言が仲間の助言を受けて書き記した作品であり、述語さえわかれば、現代でも読者は清少納言たちの宮中での生活を理解できるから。
イ　清少納言が仲間と協力して作り上げた作品であり、述語を補足すれば、現代でも読者は清少納言の心情に寄り添って読むことができるから。
ウ　清少納言が仲間に支えられて完成させた作品で、省略された主題を補えば、現代の読者も清少納言やその仲間たちと感情を共有できるから。
エ　清少納言が仲間を読者とみなして執筆した作品で、主題を理解できれば、現代の読者も清少納言たちと同様に余韻に浸ることができるから。

3

次の文章を読んで、(1)〜(6)に答えなさい。

私のなかの「非合理的に見える進化を遂げた動物ランキング」で堂々の第1位に輝くのは、「ウ」である。川や海に生息し、黒光りした美しい羽をもつ、比較的身近な水鳥だ。(中略)

ペンギンをはじめとする潜水性の鳥類は、羽に〝撥水(はっすい)加工〟をほどこすことを紹介した。尾羽の近くから分泌される皮脂を全身に塗り、水をはじくようにする、いわゆる「羽づくろい」のことだ。これにより、長時間潜水したあとでも、上陸して体をぶるぶると震わせれば、羽の表面についた水滴をはじきとばし、あっというまに乾かすことができる。雨の日にレインコートを着て外出するのと似たようなものだ。帰宅後にバサバサと振れば、付着した雨粒は飛んでいって、レインコートはすぐに乾く。

このような撥水加工の利点のひとつは、断熱効果が高まることだ。潜った際に羽が濡(ぬ)れてしまうと、周囲の冷たい水が皮膚に直接触れ、どんどん体温を奪われてしまう。羽が濡れないようにすることで、体のまわりに「空気を含む羽の層」を作り、空気の断熱効果によって体温の低下を防止することができるのだ。入浴後のドライヤーが面倒臭くて、つい放置して湯冷めしてしまう私からすると、なんともうらやましい仕組みだ。

[ⓐ]、だ。ウの仲間は、潜水性の鳥類でありながら、羽の撥水能力が非常に低く、潜ったあとはびっしょりと濡れてしまう。皮脂を分泌する器官(尾脂腺)は存在しているし、ほかの種と同じように羽づくろいもするのだけれど、羽の構造が水を吸いやすいようになっているのだ。

前述したとおり、羽が濡れていると体が冷えてしまう。水を吸った羽は重くて、空を飛ぶのも難しくなる。そのためウは、潜水後、翼を左右に大きく広げ、乾くまでじっと待ちつづける。日あたりや風の強さによって翼を広げる時間が変化するらしく、ⓑ洗濯物を干すかのようだ。(中略)

ほかの潜水性鳥類があっというまに体を乾かす様子と比べると、ⓒなんだかとっても非合理的で、「これはさすがに劣化なのでは……」なんて思ってしまう。

では、彼らはなぜそんな進化を遂げてしまったのだろうか？

まだわかっていない部分もあるようだが、濡れてしまう羽にはひとつだけ確実なメリットが存在している。水をはじいて空気の層を作ることができないため、圧倒的に潜りやすいのだ。空気の層が増えれば増えるほど浮力は増し、潜水することは難しくなる。撥水加工をした羽で潜るというのは、ライフジャケットを着たまま潜るようなものなのだ。

しかも、近年の研究により、ウの羽は完全に水没してビショビショになるのではなく、ほんのわずかに濡れない部分があることが報告されている。羽は、「瞬時に濡れる外側部分」と「防水性の高い内側部分」の2層構造になっていて、どうやら最低限の空気の層は確保しているようなのだ。

つまりウの仲間の羽は、潜りやすく、かつある程度は体温を維持できるような〝いいとこ取り〟の構造になっているらしい。潜水後、羽を広げて乾かすことは、その代償なのだ。そう思うと、ⓓコミカルに見えていた「乾燥のポーズ」が、堂々と胸を張った立派な立ち姿に見えるような気がしてくる。それでもやっぱり、どこか滑稽でかわいらしくも感じてしまうけれど。

ちなみに、このことを示した研究論文の中では、「ウの羽は撥水性がない」というネガティブな表現ではなく、「ウの羽は水との親和性が高い（水が付着しやすい）」というポジティブな書き方になっている。世の真理は多面的で、見ようによっては真逆のとらえ方になるということをつくづく痛感する。ビショビショになってしまうウの羽は、けっしてペンギンの羽に劣っているわけではないのだ。

進化という言葉は、一般的には、「強くなること」「洗練されること」「進歩すること」といったニュアンスで使われることが多い。一方、退化という言葉は、進化の対義語として扱われ、劣化に近いネガティブな意味合いで使われている。

ところが生物学では、進化と退化は反対の概念ではなく、退化も〝進化の一部〟として扱われる。

たとえばウマの仲間は、進化の過程で中指以外の指が退化して小さくなり、いまでは中指が変化してできた1本のひづめだけになってしまった。指の減少は「退化」と呼ばれるが、こうした変化は、走行に適した「進化」でもある。生物学において、進化とは世代を超えて起きた「変化」のことで、変化の方向がプラスかマイナスかは関係ないのだ。

［ⓔ］、生物の身体構造の変化にプラスやマイナスという概念は存在するのだろうか。一本指のウマは、安定して力強く地面を蹴って走ることができる代わりに、物をつかむことはできない。水に濡れるウの羽は、潜りやすい代わりに、潜水後は羽を乾かさなくてはならない。生息する環境や行動が変われば、「適応的な構造」も変化する。優先事項が異なるもの同士を比較して、どちらが良いのかジャッジすることなど不可能だ。

このような「あちらを立てればこちらが立たぬ」という状況は、生物の進化において頻繁に生じている。ある面では生存に有利な良い構造であっても、別の側面ではむしろ悪い効果をもたらす、というケースは意外に多いのだ。（中略）

さまざまな生き物の体の構造を見比べていくと、メリットのみの進化なんてごくごく一部の例外なのではないだろうかと思わされる。さまざまな制約があるなかで、デメリットを受け入れたうえで、「それでもなんとかうまくやっていける」という妥協点を探る過程が、進化の本質なのかもしれない。

（出典　郡司芽久（ぐんじめぐ）「キリンのひづめ、ヒトの指」）

（注）
コミカル――滑稽なさま。
ネガティブ――否定的。対義語の「ポジティブ」は肯定的という意味。
ニュアンス――語句・表現などの微妙な意味合い。
ジャッジする――判定する。
メリット――利点。対義語の「デメリット」は欠点という意味。

(1) ［ⓐ］、［ⓔ］にそれぞれ入れることばの組み合わせとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　ⓐ　ところが　ⓔ　そもそも　　イ　ⓐ　そのうえ　ⓔ　むしろ　　ウ　ⓐ　また　ⓔ　実際に　　エ　ⓐ　しかし　ⓔ　つまり

(2) ⓑ「洗濯物を干すかのようだ」とありますが、この部分で使われている表現技法として最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　対句法　　イ　倒置法　　ウ　直喩法　　エ　隠喩法

(3) ⓒ「なんだか……思ってしまう」とありますが、ペンギンとウの仲間の羽の違いについて整理した次の表の［X］、［Y］に入れるのに適当なことばを、文章中からそれぞれ四字で抜き出して書きなさい。

	撥水能力	［X］	潜水の代償
ペンギンの羽	高い	空気を含む層が多いので高い	
ウの仲間の羽	低い	空気を含む層が少ないので低い	［Y］のが難しくなる

(4) ⓓ「コミカルに……気がしてくる」とありますが、筆者がこのように感じる理由を説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　羽を乾かすことは潜水性の鳥類としての理想的な進化を遂げた代償だとわかり、ウは退化したという誤った認識を改めたから。
イ　水を吸いやすい羽にはデメリットだけでなくメリットもあるとわかり、ウの立ち姿を別の視点から見られるようになったから。
ウ　潜水しやすくなる代償として羽を乾燥させることが必要であるとわかり、何度も見ているうちにウの格好良さに気づいたから。
エ　ウの羽の性能はペンギンのものよりも優れているのだとわかり、ウの立ち姿が自分の羽を誇示しているかのように見えたから。

(5) この文章で述べられた、筆者の考える「進化」について説明した次の文の［　　］に入れるのに適当なことばを、四十字以内で書きなさい。

進化は、世代を超えて起きた身体構造の変化であり、生物が［　　］ことによって起こるものである。

(6) この文章の構成と内容の特徴について説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　進化について、近年の研究論文の内容を示しながら論を展開しているため、筆者の主観や感想を排除した客観的な説明になっている。
イ　生物の進化と退化について対比的に説明することにより、両者の違いを明確にして、進化によって得られるメリットを強調している。
ウ　生物の進化の仕組みについて段階的に説明することで、高度な進化を遂げた生物にどのような特徴が見られるかを明らかにしている。
エ　論を補強するために複数の具体例を効果的に用いて、進化に対する一般的なイメージとは異なる筆者の主張に説得力をもたせている。

4

図書委員の花子さんは、「図書室だより」に掲載する記事を先生に見てもらっています。次の【会話】を読んで、(1)～(3)に答えなさい。

【会話】

先生　前回作成した記事（【資料Ⅰ】）と比べて、今回作成した記事（【資料Ⅱ】）はずいぶんよくなりましたね。ⓐ引用の仕方について指摘したこともすべて修正されていますよ。

花子　本当ですか。一生懸命書き直したのでうれしいです。

先生　引用については、著作権法でも規定されていますからね。そのため、ⓑ著作物を使用する際には気をつける必要があります。

花子　著作権法は著作者の権利を守るためにあるんですよね？　それなのに、どうして図書室では無償で本を貸し出すことができるんですか？

先生　いい質問ですね。実は、著作権法の目的は、文化を発展させることにあるんです。

花子　つまり、ⓒ図書室が無償で本を貸し出すことはその目的の達成につながっている、ということですか？

先生　そのとおりです。著作権法についてまとめた資料（【資料Ⅲ】）があるので、これを見ながら一緒に考えてみましょう。

花子　はい。お願いします。

(1) ⓐ「引用の仕方について指摘したこと」とありますが、先生が花子さんに指摘したこととして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア　文章の半分以上を引用が占めており、引用した内容と主張は関連していないこと。

イ　引用部分にかぎかっこがなく、引用した内容を自分の考えに生かしていないこと。

ウ　出典について明確に示しておらず、文章の半分以上が引用になっていること。

エ　出典が何かを書いておらず、引用部分にかぎかっこが付けられていないこと。

【資料Ⅰ】花子さんが前回作成した記事

図書室だより　1月号

今年はうさぎ年ですね。スポーツ選手の井沢冬子さんは、その著書で「私の人生には、数多くの困難が待ち構えていた。何度もくじけそうになったが、いつも私に力をくれたのは、大きく高く跳躍するうさぎの姿だった。大好きなうさぎの跳ねる姿をイメージして挑戦すれば、どんな困難も乗り越えられた」と書いていました。みなさんも目標を立てて挑戦し、跳躍の1年にしませんか。

【資料Ⅱ】花子さんが今回作成した記事

図書室だより　1月号

今年はうさぎ年ですね。うさぎはただかわいいだけでなく、跳躍力が優れていて、「大好きなうさぎの跳ねる姿をイメージして挑戦すれば、どんな困難も乗り越えられた」（井沢冬子『私とテニス』桜木出版、2022年、37ページ）というスポーツ選手もいます。

今年、私は本を100冊読むことに挑戦しようと思っています。みなさんも目標を立てて挑戦し、跳躍の1年にしませんか。

(2) 「ⓑ著作物」とありますが、【資料Ⅲ】からわかる著作物として**適当でない**のは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 友達が描いたイラスト　**イ** 日本の総面積のデータ　**ウ** 環境問題についてのレポート　**エ** 授業で作った楽曲

(3) 「ⓒ図書室が……つながっている」とありますが、これについて、あなたの考えを**条件**に従って八十字以上百字以内で書きなさい。

条件

1 二文で書き、一文目には、「図書室が無償で本を貸し出すこと」について、著作者または利用者にどのようなメリットがあると考えられるかを、解答欄の書き出しに続けて書くこと。

2 二文目には、一文目で書いたことが、【資料Ⅲ】にある著作権法の目的の達成にどのようにつながるか、わかるように書くこと。

【資料Ⅲ】先生が著作権法についてまとめた資料

著作権法について

第１条（目的）
　著作物並びに実演、レコード、放送及び有線放送に関し著作者の権利及びこれに隣接する権利を定め、これらの文化的所産の公正な利用に留意しつつ、著作者等の権利の保護を図り、もつて文化の発展に寄与することを目的とする。

つまり、著作権法は「文化の発展に貢献する」ことを目的としており、その達成のために著作者の財産的利益や精神的利益に関する権利を保護したり、著作者以外にはルールの範囲内で著作物を利用できる権利を与えたりしているということです。

ここでいう「文化の発展」とは、「著作物が豊富化・多様化すること」（中山信弘『著作権法　第３版』有斐閣、2020年、26ページ）を指しています。

第２条（定義）
一　思想又は感情を創作的に表現したものであつて、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するものをいう。

この定義から、著作物とは
①「思想又は感情」に関するもの
②「創作的」なもの
③「表現した」もの
④「文芸、学術、美術又は音楽の範囲」に属するもの
という４つの要件すべてを満たすものだといえます。

（文化庁「著作権テキスト－令和４年度版－」、中山信弘『著作権法第３版』から作成）